

△資料翻刻▽ 小野勝年遺稿宸翰雜集記註(一)

信 廣 友 江

小野勝年(一九〇五・明38—一九八八・昭63)は東洋学者。奈良国立博物館学芸課長、龍谷大学教授を歴任。文学博士。一九三七(昭12)年、京都帝国大学東方文化研究所員として五台山など中国各地の仏教遺跡を調査し、一九五九(昭34)年には共同研究「居庸関」で学士院賞を受賞している。その著「入唐求法巡礼行記の研究」はよく知られる。また、張彦遠『歴代名画記』、敦崇『北京年中行事記』の訳註は岩波文庫に収める。

小野は、聖武天皇宸翰雜集校訂本一卷ならびに訳註稿本四巻を残している。原稿には、種々の万年筆や鉛筆、また赤ボールペンによる加筆が幾度も重ねて行われる。また、随所に加筆修正のための用箋の貼り込みや挿入があり、丹念な推敲のあとが見てとられる。

本稿は、右の遺稿から訳註稿本を取り出して翻刻し、小野の学問姿勢を問うとともに、宸翰雜集読解の資料として提供しようとするものである。このうち(一)は、全四巻のうち第一巻冒頭部を取り上げる。原本は、右綴じの冊子の体裁で保存され、表紙には小野自身の手で「小野勝年宸翰雜集訳註稿巻一」と墨書される。また、末尾には「昭和五十年五月七日校了」とのペン書きがある。なお、同稿は未定稿であるため、翻刻にあたって、原文と書き下し文との間

の註番号等に相違が認められる場合は、調整の上、修正した。また、推敲中に生じたと思われる脱字、文字の重複、返り点や送り仮名の未修正等がある場合は、最小限の修正を施している。漢字は原則として新字体に変換した。

「雑集」総目録

- 一、巻首 欠
- 二、某 婦去来詩 二首
- 三、王居士 涅槃詩 二十五首 欠一首
- 四、同 奉讚浄土詩 十三首
 - 宝池観 宝樹観 宝楼観 捨観 像観 法身観 花座観
 - 観音観 勢至観 捨二 菩薩観 上品観 中品観 下品観
- 五、隋大業主 浄土詩 三十二首
- 六、真観法師 無常頌 一首
- 七、同 奉王居士請題九想即事 一首
- 八、同 観白骨歎無常 一首
- 九、同 奉請文 一首

十、積靈実 画像讚 十三首

画弥勒像讚 並序 一首

画錠光像讚 並序 一首

画弥勒像讚 並序 一首

祇洹寺経台内功德讚 並序 一首

画地藏菩薩像讚 並序 一首

画盧舍那像讚 並序 一首

画觀音菩薩像讚 並序 一首

画瑞心像讚 並序 一首

画迦毘羅王讚 並序 一首

毘沙門天王讚 一首

画釈迦像讚 並序 一首

会稽県令独弧公画讚 一首

予且画讚 一首

十一、同 祭文 十七首

為桓都督祭禹廟文 一首

為陸州別駕崔祭禹文 一首

劉明府八日設悲敬二田文 一首

大善寺造像文 一首

法華寺造浄土院文 一首

為人父母忌齋文 一首

為人父忌祭文 一首

為人母遠忌設齋文 一首

為人母祥文 一首

為人妻祥設齋文 一首

為人妻妊娠願文 一首

為人息神童拳及第設齋文 一首

為人為息賽恩齋文 一首

為母慶造経成了文 一首 欠

大興寺造露盤文 一首

為人社齋文 一首

大善寺造橋文 一首

七月十五日願文 一首

十二、北周趙王招文 七首

道会寺碑文 一首

平常貴勝唱礼文 一首

無常臨殯序 一首

宿集序 一首

中夜序 一首

藥師齋序 一首

兒生三日滿月序 一首

十三、積僧亮 觀行内雜詩 二首

像法吟 一首

性浄法身八詠 並序 一首

第一動会寂 第二光照融 第三体本末 第四無始終 第

五滿法界 第六自性充 第七滅功用 第八理難窮

十四、積亡名 宝人銘 並序 一首

十五、某 婦去來詩 二首

十六、某 隱去來詩 三首
十七、某 早還林詩 並序 十首

附 淨土・穢土偈 二首

□□□□知
六管□□知

〔某。歸去來詩。二首〕

〔作者知らず 帰りなんいざの詩 二首〕^①

①「雜集」の巻首が欠落しているので、前後の関係を詳にするこ
とができないが、仮に二首とした。後文にも同名の「歸去來詩
二首」を収録している。この方は何れも七字句を根幹としてい
るが、第一首はとくに長篇で、同類のものとしては東晋の陶淵
明の「歸去來兮辭」のごとき、著名な作品がある。敦煌からも
「歸去來」七首が出土している（P三〇五六）。ただし、この断
欠は五字句からなっている。

歸去來。三界擾々不可居。会是歸依真徳^本、除^①心掃意遊
太虚[△]。莫^レ謂無^レ心同^二木石^一、寂^②寥之外仍多^レ娛。譬如^二日月無^レ
心照、冥^③靈感心、光自舒[△]。稀^二求外行次第^一、不^レ及^二身中無^レ個
珠[△]。旬々諾々無^レ異^④語、千思万慮同^二一如[△]。釵鐙環釧名雖^レ別、
捻^二言^一體^二無^レ異^殊[△]。但言^三空宗無^二二行^一、勿^下学^二二乘^一長^中□^{尊カ}
愚^上。君不^レ見、巖栖隱遁阿練師、邀^二身出^レ累、實^二稀奇^一、餐^レ松

食^レ栢支^二軀命^一。端^レ心静^レ慮守^二威儀^一、從^レ形信^レ命隨^二狼虎^一。無^レ
□<sup>無^レ慮懼^二安危^一、匡坐^二長林磐石^上。遊^二神雅^一素^二一快^二無^レ
為^一、良由^レ厭^二離諸塵色^一、□□<sup>獨歩不^二飢^一。行路^レ難^レ審依^レ經、
莫^レ作^二門前逐^レ塊狗^一。離^レ群別^レ侶即望^レ成、不^レ如^三□光同^二四
衆^一。眼看^二声色^一不^レ関^レ情、五塵五境能^レ調得。敵^三彼巖谷<sup>当^二千
齡^一、善觀^二六塵^一無^二來去^一。百煩百惱^⑧亦無^レ形、千思万想皆心
作、微^レ本究^レ末寂^②無^レ名[△]。</sup></sup></sup>

校字。①除。字画未詳、下文掃とあるを以つて除に擬す。②寂。作
寐。③冥。作冥。④異。字画未詳、暫擬異。⑤坐。作坐。⑥雅。字
画未詳、暫擬雅。⑦觀。作觀。⑧惱。作惱。

かえりなんいざ。三界^①は擾々^②として居るべからず。かならず
これ真の徳本に、帰依すべし。心を除^③き、意を掃^④いて、太虚^④に遊
ばん。謂^⑤うなかれ、心無きこと木石に同じと、寂寥^⑤の外に、より
て娛^⑥しみ多し。譬^⑦えば日月は心なくして照し、冥霊^⑧は感応し、光は
自ら舒^⑨ぶるがごとし。外の行ない^⑩の次第に実るを稀^⑩い求めるは、身
中の価いなき珠には及ばず。旬々諾々^⑦も異なるの語なく、千思万慮も
同じく一如^⑧たり。釵鐙と環釧^⑨とは名は別なりといえども、□^⑩体を
捻^⑪言^⑪えば異殊なるなし。ただに空宗^⑩は二行^⑪無しと^⑪言いて、二
乗^⑫を学んで専愚を長ぜしめることなかれ。君、見ずや、巖栖^⑫し隱遁^⑫
するの阿練師^⑬が、身の累^⑬いより出づることを邀^⑬めて、稀奇^⑬を突た
さんとし、松を餐^⑭い栢を食べて、軀命^⑭を支え、心を端^⑭し、慮^⑭を静
め、威儀を守るを。形に従い命を信べ、〔狼^⑭〕虎^⑭を隨^⑭えるも、擾

い無く慮り無ければ、安危を懼れん。匡しく長林の盤石の上に坐して、神を雅素に遊ばしめて、無為を快しとす。まことに由りて諸の塵色を厭離し、□□として独歩して□飢えず。行路は難し、^⑭は難ければ、審かに経に依り、門前の塊を逐うの狗となることなかれ。群を離れ、侶に別れて、すなわち成ずることを望むは「和光」^⑮の四衆^⑯に同じなるにはしかず。眼は声色を看るも、情には関らず、五塵五境^⑰をよく調う。彼の巖谷のまさに千令なるに敵い、善く六塵^⑱を觀すれば来去なし。百煩百惱もまた形なく、千思万想は皆、心より作る。本を徴らかにし、末を究むれば、寂として名づくるなし。

校註。異字。帰は歸に作る。寂は寂に作る。与は與に作る。慮は慮に作る。通は通に作る。觀は觀に作る。冥は冥に作る。関は關に作る。得は得に作る。敵は敵に作る。以下異字特に異なるもの以外は注記しない。

①三界。欲界、色界、無色界。ここには世間というに同じ。

②擾々。さわぎみだれること。

③除心。ここには心をはらいきよめること。

④太虚。普通には大空をいい、虚空と同じであるが、ここには虚無深玄のところ、「莊子」知北遊にもとずく。

⑤冥靈。冥海の靈龜。一説には南方に生えた大椿という木名とい
い、「莊子」逍遙遊、「列子」湯問に見える。後者に「荆の南に冥靈なるものあり、五百歳をもつて春となし、五百歳を秋とな

す」とある。

⑥外行。外行星（遊星）の略か。ただし、ここには世俗的行為とその結果の義か。外行は身中に対して用いている。

⑦匄々諾々。大声を発して賛成する。ここには声は大きくても内容は結局、異らないの義。

⑧一如。唯一絶対のもの。ものの区別を断つこと。なお如は前句の居・虚・娛・舒と同韻。

⑨釵鑷・環釧。かんざしとうでわ。この二つは要するに裝飾のためのものである点で共通している。

⑩空宗。三論宗の別名。一名無相宗ともいう。「中論」「百論」「十
三門論」を所依として、空・無相・八不中道の理を宣揚する学
派であるので、かく名付ける。さらに「智度論」も加わった。

「般若経」は般若波羅蜜 (prajna-paramita) を説くが、これは智慧の完成の義といい、智慧とは空の智慧であり、この空 (Sunya) は大乘經典をつらぬく思想である。かくてこれを論究するがこの学派の立場である。

⑪無二行。唯一無比のおこない（修行）。

⑫二乗。乗とは衆生を運んで、生死の海を渡る乗物のこと。ここには声聞・菩薩、すなわち大小の二乗であるか。あるいは三論宗の破耶頭正の二門をさすか。または真俗二諦乃至空有の見の
ごときを指すかとも考えられる。

⑬阿練師。梵語 Aranya (阿羅若) を求める師僧。阿羅若は空寂と
訳す。

⑭□虎。猛虎のたぐいか。

⑮雅素。優雅素常の略。みやびやかなものつけがれないこと。あるいは潔白なこと。

⑯塵色。世俗のけがれ。

⑰行路々難々。行路難路難の略。下の路難は次句に続く。

⑱逐塊狗。知のないものは「結」果のみもとめて、「原」因について考えぬ。あたかも塊を追う犬の、塊を投げる人をきわめることをしないのたとえ。

⑲「和」光。「老子」の「その光に和して、その塵に同じくす」。

仏語としては仏菩薩の威徳の光を和けて、諸の悪人に近づき種々の身を示現し、また悪人と同処してこれに染まらないこと。

(和光同塵) —— 涅槃經六 ——

⑳四衆。比丘、比丘尼、憂婆塞、憂婆夷。または發起衆、当機衆、影向衆、結縁衆をいう。ここには仏教を信するすべての衆生。

この二句は声門独覚という小乗的態度に対し、われと一切衆生とともに菩薩道を行ずる大乘的行爲にしかざるをいう。

㉑五塵・五境。五塵とは色・声・香・味・触。五境は眼・耳・鼻・舌・身。俱舍論ではこれを合せて十法といい、色法十一種中に

数えている。調、調御・調伏などの略。

㉒千齡。千歳と同じ。長き年月の形容。

㉓六塵。五塵にさらに識乃至法を加えたもの。一に六根・六境・

六識などともいい、人間の感覚や意識を分け、これを仏教の認識論や存在論の基本乃至出发点とする分類の一括名。色・声・

香・味・触・法は心と垢染する所縁となるというにもとずき六塵という。

居・虚・娛・舒・如。奇・儀・危・為・飢・経・成・情・齡・
形・名は同韻。

歸去來。他郷不_レ久安_△、不_レ如_レ還_二歸無相宅_一。方寸之地容_二涅槃_△、三千世界同_二居止_一。①恒沙雜類共一般、山河出入皆無_レ妨。本不_レ嫌_二狹_②亦不_レ寬、譬若_下須弥入_二芥子_一。往來無礙中現上、恒沙菩薩道場端_△。觀_二此逍遙栖_レ神處_一。③三徑六道悉荒殘。急手安_レ心持_二淨戒_一。勿_レ使_二頭白歲將_レ蘭_△。

校字。①止。作じ。②狹。原文作陝、敢而改之。③処。作處。

帰りなんいざ。他郷は久安ならず。無相の宅_①に還歸するにはしかず。方寸_②の地といえども涅槃を容れ、三千世界_③は居止を同じくす。恒沙_④の雜類と共に一般たり、山河に出入して、皆妨ぐるなし。もとよりきらわず狭くまた寛からざるを。譬_{たと}えれば須弥の芥子に入る_⑤がごとし。往來は無礙にして、復_{また}中_⑥ほどに現われ、恒沙の菩薩の道場は端_{ただ}。逍遙として神を栖_すましむるの処を觀れば、三徑_⑦六道_⑧はことごとく荒殘たり。手を急_{いそ}がせ、心を安んじ淨戒_⑨を持して、頭白の歳をして蘭_{らん}を將_とらしむる_⑩なかれ。

①無相の宅。衆くのすがたかたち(相)を絶した真理のすみか。

②方寸。一寸四方、すなわちわずかの面積。

③三千世界。三千大世界。須弥山を中心に七山八海を交互にめぐらし、鉄围山を外郭としてこれを一小世界といい、その千倍が

小千世界、さらに千倍を中千世界、さらに千倍して大千世界という。居止。住居・居住。その住居が三千世界に等しい広さを持っているの義。

④恒沙。ガンジス河の砂の数、莫大にして無限に近きこと。山河。ここには諸地域をいう。

⑤須弥入芥子。須弥山は高八万四千由旬ありという大山で、巨大なものが芥子粒のごとき小さなものに自由に出入すること。

〔維摩経〕不思議品に見ゆ

⑥復。また、あるいはとも訓む。

⑦三径。陶淵明の婦去来詩にも、三径荒につくも松菊なお存す、とある。復世隠士のいるところを指している。

⑧六道。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上。ただし、ここは三径の対句で、世間を指すのであろう。三径六道、出世間の清浄界と俗世間。

⑨淨戒。戒律を守って清浄な生活をいとなむこと。

⑩将蘭。採蘭と同じであらう。蘭は香り高き植物、闌すなわち「たけなわ」と音通。頭白の老境において若きときなすべきを怠った後悔をいだくことなかれの義と思うが、典拠未詳。

○安・槃・般・寛・また端・残・蘭など同韻。

王居士涅槃詩 廿五首 輔賢

善星翻入^レ地、槃特倒生^レ天。直須^レ持^二一偈^一、何勞^レ脩^二四禪^一。塵生^二後身後^一、業起^二前心前^一。豈假^レ多^二營務^一、無為即自然。

野馬誰言^レ有、浮雲本自無。雖^レ論^レ入^二聖位^一、終是墜^二凡夫^一。尚^レ道為^二生乳^一、何由見^二執蘇^一。攢搖功已薄、詎得^レ出^二醍醐^一。

王居士の涅槃の詩 二十五首 賢にやくだたしむ。

善星^{ぜんしやう}①は翻^{ひるがえ}って地に入り、槃特^{はんたつか}②は倒^{さかさま}に天に生る。直^{ただ}にすべからく一偈^③を持すべく、何ぞ勞^{らう}さん四禪^④を修むるの^{こと}を。塵は後身の後より生じ、業^{いごう}は前心の前より起る。⑤。あに營務の多きを仮^からんや、無為はすなわち自ら然り。

①善星。善星王 Isvaku のこと。仏が太子であったときの子とい、出家して十二部経を誦して煩惱を断ち、第四禪定を發得し、さとり道の道にすすむべき身分であったが、悪友のために解脱を失い、生きながら無間地獄におちたので、後に闍提比丘とも称された。闍提とは不信、不成仏の意で、この王子が遂にさとりをうるに至らなかつたところからの命名。

②槃特。半託迦 Pundaka のこと。兄弟二人あり、兄を大路边王、一に大路といい、弟は小路辺王、一に愚路という。共に路上に生まれた。兄は聡明、弟は愚鈍であったが、共に出家して羅漢果を証したという。倒は反対に云々の義。

③一偈。ここには諸行無常、是生滅法のごとき唯一の偈文を指しているであらう。

④四禪。觀・練・薰・修の四種の禪定。一に四禪定という。一事を守るべく、多岐にわたる修行は必ずしも必要ではないとの義。

⑤塵。仏語ではもと梵語 *rajas* の訳。煩惱を指す。業は梵語 *karma* の訳。生けるもの身・口（語）・意によって造作されるもの。

後身後と前心前は対句。煩惱や業報は人々に対して先天的に付随するものである。したがって、これを払い除くためのいとなみを敢て行う必要はない。むしろ「老子」の無為自然こそ依るべきであるの意であろう。

野馬^①は誰か有りという、浮雲も本は自ら無し。聖位^②に入るを論ずるといえども終にこれ、凡夫に墜^おん。尚道^なびきて生乳となさば、何に由りて孰^{じゆく}「熟」蘇^そを見んや。攢^{あつ}め揺^{うご}すの功^{いさ}すでに薄^{うす}ければ、詎^{いず}んぞ、醍醐^{だいご}を出^いすを得んや。

①野馬。かげろう。かげろうやうき雲は本来把握できない性質のものである。

②聖位。三乗の聖果によつて得られるけだかい位。「華嚴経」巻二六に「願くは一切衆生、速に聖位に入らんことを」とあり、尊位などというに同じであろう。

③墜。墜と同じく、おちいること。この二句はまことの修道によつて得た聖位でなければ、凡夫の仲間と変りなきことを詠じている。

④孰蘇。熟酥と同じ。牛乳から作られたよき飲料。醍醐は五味の一といい、さらにこれから生ずる精良な最高の飲物。「涅槃経」に、「譬如^下徒^レ牛出^レ乳、徒^レ乳出^レ酪、徒^レ酪出^レ生酥、徒生

酥出^二熟酥^一、徒^二熟酥^一出^二醍醐^一、醍醐最上^上。」とある。生乳↓熟酥↓醍醐と次第するのであるが、その過程において、袋または桶に入れ、ゆりうごかしてはじめて最高の美味がえられる。ただし、この詩句いささか表現が抽象的で訓読にくるしむ。

薬樹雖^二良薬^一、医王定善医、生盲不^レ可^レ療、死病若^レ為^レ治。梅陀漸臨通、羅刹転愚痴、正念猶^二須正^一、思惟宜^二更思^一。

身形成^レ大地、□^①骨煩惱瑣。□□□□□□^②、尚着^二無明枷^一。六塵俱是賊、四大並如^レ蛇。若須^レ澄^二苦浪^一、応^三先滅^二愛華^一。

校字。①□、案一字脱落。②疑一句五字脱落。

薬樹は良薬にして、医王^①は定^かず善医なりといえども、生れながらの盲^やは療^いすべからず、死病はいずくんど治をなさんや。梅陀^②も漸^{すす}んで臨通し、羅刹^③も愚痴を転^{てん}せん。正念^④をしてなお須らく正すべく、思惟をして、よろしく更に思うべし。

①医王。医中の王、仏を称賛して医王に譬える。「無量義経」は医王、大医王、病相を分別して、薬性を曉了し、病にしたがって薬を授け、衆生をして服せしむとあり、また薬師如来の別名として用いる。ただし、ここには薬樹と相對し、名医をいう。

②梅陀。梅陀羅の略。梅陀羅は梵語 *Candala* の訳。一に險悪人、主殺人、治狗人などともいう。もつとも下賤なインド種族の一

という。「法顕伝」に「梅荼羅は名づけて悪人となす。人と別居し、もし城市に入らば則ち木をうちて以つて自ら異にす。人すなわち知りてこれをさけ、相搪突するなし」云々とみえる。

臨通。ここには一般の人々と交るようになることであろう。

③ 羅刹。悪鬼の総称。転。転化するの義。導くことよろしければ善にいたるの義。

④ 正念。八聖道の一。部分別とはなれて法の実性を念ずること。正念と思惟をしてさらに精進せしめるならば、梅荼羅も羅刹も、人々のきらうことなき境地にいたることをいう。

身形は大を成ずるの地、□骨は煩惱の瑣たり。①。□□□□□②、なお無明の枷を着く③。六塵④はともにこれ賊にして、四大⑤はならびに蛇のごとし。もし苦勞を澄ますをもちいなば、まさに先ず愛華⑥を滅すべし。

① 骨。心骨または骨肉などという語の脱字であろう。身形の対句である。瑣。鎖に通ず。

② この詩はもと八句で、五字一句脱落とすべく、瑣・枷・蛇・華が同韻であるから、この間に五字の脱落があると解したい。

③ 無明枷。無明は痴の異名。愚痴の枷にしばらく、真実のものを得ないこと。

④ 六塵。一に六境ともいう。六識の所縁となる六種の垢染(けがれ)。前註。

⑤ 四大。地・水・火・風。天地または人体を構成する四大原素で、

人体はやがて分裂して死にいたるので、しばらく四蛇——蛇の俗字——に例えられる。「最勝王経」五に「譬うれば機関の業によつて転ずるがごとし。地水火風ともに身を成じ、かの因縁によつて異果を招き、同じく一処に在りて相違害し、四毒蛇の一篋に居るごとし。地水二蛇は多く沈下し、風火の二蛇は性軽拳なり。この違背により衆病生ず」とあり、「智度論」十二にも「篋中に四蛇あり、…四毒蛇は四大なり」と、見える。その他「大般涅槃經」、空海「性靈集」為「酒人内公主」遺言にも「四蛇、身府に相闘う」とある。

⑥ 愛華。愛欲執着をいう。

愛河無「復底」、劫石記論^レ年。五蓋長相蓋、十纏由見纏。空驚^二狂象醉^一、終共^二睡蛇^一眠。若知^二身可^レ畏、宜^三速救^二頭然^一。

劫々皆賢劫、人々尽世人。直計^二同名者^一、応^レ如^二大地塵^一。並列^二無為処^一、俱成^二不壞身^一。独悲^三逃进子、猶著^二死生輪^一。

愛河^①にはまた底なし、劫石^②はいづくんぞ年を論ぜん。五蓋^③は長えに相蓋い、十纏^④はよみて見^⑤に纏わる。空しく狂象^⑥の酔におどろくも、終には睡蛇^⑦と共に眠る。もし身の畏るべきを知らば、よろしく速かに頭の然ゆる^⑦を救うべし。

① 愛河。愛欲を河にたとえる。ここには愛欲の際限なきをいう。

② 劫石。劫は遠大無限の時間。盤石劫ともいい、大石山を軟い布

で払い、大石の摩滅するに要する年月。「智度論」五に、四十里の大城に芥子を満たし、長寿の人ありて、百歳に一たび来り、一の芥子を取り、一の芥子をつくるも、劫はなおつきざるなりと形容する。

③五蓋。心性を蓋せ覆いて善法を生ぜしめない五種の障害。すなわち、食欲・瞋恚・睡眠・悼悔・疑法。

④十纏。十種の妄惑。衆生を纏縛して生死を出でしめず、また涅槃を証せしめないもの。無慚・無愧・嫉・慳・慎・睡眠・掉挙・昏沈・瞋忿・覆。

⑤見。現在の現とも通ず。あるいは見纏としてまつわるところと受身に読める。

⑥狂象の酔。釈迦の酔象調伏の説話にもとづく。さかりのついた象。「法苑珠林」に、譬へば王が酔象を放つがごとく、牙の利(するど)く、凶悪にして、遇うもの皆死す云々とある。狂象と毒竜に苦しめられる譬えは「雜譬喻經」卷四などに見える。睡蛇は死のせまること。妄心の狂い迷うをたとえたもの。

⑦頭然。然は燃に通ず。頭上で火がもえること、急遽救うべきもの、すなわち危急にたとえる。暗に「法華經」譬喻品の火宅の譬えをさすかと思われる。

劫々は皆、賢劫^①、人々はことごとく世人なり。直だに名の同じきものを計れば、まさに大地の塵のごとかるべし。並びに無為の虚にいたり、俱に不壞の身を成ぜん。独り逃進子が、なお死生の輪にくを悲しむ。

①賢劫。梵語 Bhadrakalpa の訳。すなわち過去の莊嚴劫、未来の星宿劫に対して、現在の住劫といい、千山賢聖の出生する時分のこと。

②逃進子。世俗のならわしからのがれて安心をもとめる人。逆(ほう)またはひやう)、はしりのがれる。逃避というに同じ。この詩意は無為の境地において金剛不壞の身を成ずることができ、さとりを求めることから逃避しようとしても、生死の輪廻からはのがれることはできないことを詠じている。

苦空誰得^レ際、生死無^レ為^レ窮。已^レ經^二三大劫^一、猶^レ帶^二九居中^一。欲^レ出^二燒然界^一、須^レ持^二精進弓^一。何^レ由^二苦海上^一、忽^レ遇^二涅槃風^一。

何^レ為^レ出^二世俗^一、本^レ欲^レ避^二塵喧^一。身尚^レ如^二丘井^一、心猶^レ似^二戲^一。蓋^レ纏恒見蓋、煩惱更相煩。必^レ願^レ防^二三毒^一、應^レ當^レ備^二四^一怨。

校字。①備。作原本備。

苦と空とは誰か際るを得んや、生と死とは窮まるをなすなし。すでに三大劫^①を経るも、なお、九居中^②を帯ぶ。燒然の界^③を出でんと欲すれば、すべからく精進の弓^④を持つべし。何すれぞ苦海^⑤の上よりも、忽ちに涅槃の風^⑥に遇わんや。

①際。際限(はて、かぎり)。苦と空。「般若心經」にいう「觀自

在菩薩が深く般若波羅蜜多を行ずるとき、五蘊は皆空なりと
 昭見して、一切の苦厄を度したまう」と見える。ただし、ここ
 にいう空は必ずしも般若思想にもとづくものとは思えないが、
 「心経」ではさらに色即是空、空即是色といい、この悟りに達す
 れば苦集滅道も無しとしている。生と死。生死は輪廻して、無
 始無終という。苦空と生死はともに輪廻の關係にありとする。

②三大劫。一に三劫・三阿僧祇劫ともいう。阿僧祇は無限の時間。
 九居中。九有情居・九衆生居の略。衆生が樂しみ住することを
 願う九つの場所（欲界の人天・梵衆天・極光浄天・遍浄天・無
 想天・空無辺処・識無辺処・無所有処・非想非非想処。帯は附
 随して存在するの義で、如何なる時限でも願いは附随する。

③焼然界。火宅すなわち煩惱の世界をさす。「法華経」譬喩品の三
 車火宅。（七喩の一）

④精進弓。智慧を箭、精進を弓にたとえる。

⑤欠

⑥涅槃風。悟りに到着せしむる風。「涅槃経」卷九に「このとき
 たちまち大乘の大涅槃の風において、随順して吹かれてアノク
 タラサンミヤクサン菩提——あまねく一切の真理を悟る無上の
 智慧——に向う」とある。

何すれぞ世俗を出づるをなすや、もと塵喧を避けんと欲すればな
 り。身はなお丘井①のごとく、心はなお戲猿②に似たり。蓋纏③はつ
 ねに蓋うを見、煩惱はさらに相煩う。必ず三毒④を防がんことを願
 わば、まさに四怨⑤に備うべし。

①丘井。身の老朽して役に立たないことを丘墟の枯井（廢墟の用
 いられなくなつた井戸）にたとえる。

②戲猿。猿芝居の猿。意馬心猿など猿はしばしば欲望の狂いやす
 いことにたとえる。俗世界のけがれやわずらわしさを避けよう
 としても、なお煩惱を離脱できない。

③蓋纏。五蓋十纏の略。ここには世俗のわずらい。あるいは煩惱
 をいう。

④三毒。衆生の善心を害する三種の煩惱。貪欲・瞋恚・愚痴の三
 つをいう。「法華経」譬喩品その他に見ゆ。

⑤四怨。煩惱魔・死魔・陰魔・天子魔の四魔のこと。あるいは四
 怨障、すなわち生死の輪廻をまねく、四種の迷妄。これに犯さ
 れないように心に備えをしなければならぬと詠じている。

性重非無_レ重、譏嫌尚有_レ嫌。花中虵本毒、刀上蜜非_レ甜。熱来翻
 近_レ火、渴急反求_レ塩。寄_レ語弥^①猴輩、莫_レ被_二麴膠粘_一。

劫余逢_二五濁_一、途值_二六賊難_一。捨墮終当_レ墮、僧残反見_レ残。火宅
 猶_二燒者_一、苦海尚波瀾。生死俱如_レ幻、何日至_二泥洹_一。

校字。①原文作弥。将改猕字。

性^①重も重きことなきにあらず、譏嫌^②もなお嫌うあり。花中の
 虵も毒あり、刀上の蜜は甜きに非らず。熱来りてかえつて火に近づ
 き、渴急にしてかえつて塩を求む。語を寄す、獼猴^③の輩よ、

麴膠の粘^{ねばり}④を被^{こうむ}ることなかれ。

①性重。一に性罪または実罪ともいう。自性にもとづく罪過、たとえは十戒にそむく十悪のごときをさす。譏嫌。そしりきらうこと。ここには罪悪は重きが上になお重く、嫌悪はなおますます、嫌悪すべしというにある。蛇は花中にありといえども、本来有毒なれば毒性を失わず、蜜は甜しといえども、刀上の蜜には危険がともなうのごとくである。

②熱来りて、かえって火に近づく。とんで火に入る夏の虫というがごとくである。

③猕猴。原文は弥につくる。弥・猕音通。凡夫の心のたとえ。

④麴膠粘。一に麴粘ともいう。「とりもち」のこと。粘は音デン。

劫余^①も五濁^②に逢い、途^{みち}に六賊^③の難に値^あう。捨墮^④は終にまさるべく、僧残^{のこ}も反^{かへ}つて残^{のこ}るを見^みす。火宅^⑤はなお、焼者のごとく、苦海なお波瀾^{はらん}のごとし。生死はともに幻^{まぼろし}のごとし、何の日にか泥洹^{ねはん}にいたらん。

①劫余。おびやかされて、その上更におびやかされるの義。あるいは災難の上に更に五濁や六賊に犯されること。

②五濁。五つの汚濁。劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁をいう。

③六賊。智慧をそこない、功德をそこなうもの。色・声・香・味・触・法に対してあらわれる六の障害。

④捨墮。梵語 Nissaggiya pattiya (尼薩耆波逸提) の訳。尼薩耆は贖罪、波逸提は地獄に墮る罪の義で、合せて捨墮といい、僧侶の所有に関する禁戒として三十条があり、これを犯した場合、懺悔することによって贖罪が認められる。後文の墮とはそうした贖罪があっても、絶対的見地から見れば墮落に外ならないの義としたい。同様に僧残罪も十三条あり、これを犯した場合、懺悔することによって、僧侶としての仲間に残ることが認められてはいるが、その場合も、なお破戒の罪悪は残存しているという反語として受取られる。また後句の火宅は客体としては燃焼するものであるが、主体としては火つけ役でもあるというのであろう。

⑤火宅。三界の生死をいう。焼者。火をつけてこれを燃焼するもの。「法華経」譬喻品に「三界は安きことなし、なお火宅のごとし。衆苦充滿し、甚だ怖畏すべし。つねに生老病死の憂患あり。かくのごときの火、熾然してやまず」とある。

〔二〇一〇・一〇・四 受理〕